

## 青木淳 × 杉戸洋

# はっばとはらっば

*cob web and spider*

5 青森県立美術館 4  
AOMORI MUSEUM OF ART

### 批評のトライアングル—建築家と画家と美術館と

塩田純一

青森県立美術館は、開館5周年の一連の企画のひとつとして設計者である青木淳氏にその作品を紹介する建築展の開催を依頼した。これに対し、青木氏は自ら作家を選定、キュレーションすることを提案、最終的に杉戸洋氏をパートナーに選んだ。両者による展示プラン作成、与条件に則しての修正・断念、代替案の提示といった複雑で厄介な過程を経て、ようやく姿を現したのがこの「青木淳 × 杉戸洋 はっばとはらっば」展である。

だが、それは通常の展覧会という形式からはおよそかけ離れたものである。美術館を訪れる人はいきなり眼にするブルーシートに覆われた通常のエントランスに戸惑いを禁じ得ないだろう。ついで、南側トレンチのワークショップエリアへと導かれ、普段は使われることのない階段を上ったり、下りたり、展示室以外のバックヤードに入り込んだり、館内を隈なく歩き回り、最後は職員通用口から表に出る。もちろん、建築模型も絵画も展示されているのだが、私たちの慣れ親しんでいる展覧会の形式からは著しく隔たっている。むしろ、青森県立美術館というきわめて特異な建築の総体を巡るツアーといった趣でもある。これはいったいどのような試みなのだろうか。展覧会のタイトル「はっばとはらっば」が手掛かりを与えてくれる。現代建築に明るいひとなら青木氏の著作『原っぱと遊園地』を思い浮かべるだろう。青木氏の言う「遊園地」が「あらかじめそこで行われていることがわかっている建築」であるのに対し、「原っぱ」は「そこで行われる事でその中身がつけられる建築」である<sup>1</sup>。美術品を展示し、鑑賞するという目的のために設計された美術館より、そうした機能とは無縁の廃校になった小学校での展示の方がずっと新鮮な印象を与えたりもする。「原っぱ」とは、こうした廃校のような、空間と機能が分離した結果生じた、名付けようのない自由で可塑的な状態を意味している。皮肉なことに、いたれりつくせりの美術館の空間よりは、「原っぱ」の方が人々を刺激し、創造性を引き出すことがありうる。そして、青森県立美術館は「原っぱ」的空間の現実化として構想されたのである。

確かに、三内丸山の縄文遺跡に触発された土壁、土の床の空間とホワイトキューブの構造体との噛み合わせから生まれた青森県立美術館の展示空間はすこぶる想像力に富み、学芸スタッフも大いにその刺激を受けてきた。しかし、その一方で管理的な観点や経済的な要因から、設計者の意図が十分に生かされてこなかった嫌いもなくはない。一例をあげれば、

<sup>1</sup> 青木淳 「原っぱ」と「遊園地」『原っぱと遊園地』王国社、2004年、p14.

複数のエントランスから展示室にアプローチし、自由に巡ることが期待される選択導線の考え方は、その複雑さや相当な人的ケアが必要なことから、現在ではその採用が見送られ、単一の導線のみで来館者を誘導している。冒頭のブルーシートは通常のエントランスを一時的に封鎖し、この美術館には別のアプローチもあることを知ってもらうための仕掛けでもある。

この展覧会の目的は、美術館が制度に回収されることを一旦無効にし、もう一度「原っぱ」へ引き戻すことである。だからこそ「はらっぱ」なのである。そして「はっぱ」とは新たに図面上に記された行きつ戻りつする導線が、「はっぱ」のようにも見えることに由来する。だから、「はっぱ」は「はらっぱ」に描き込まれたみずみずしいアイディアということでもある。(英文タイトルは cobweb and spider、クモの巣とクモ。確かに、建築家と画家によるこの展覧会の準備作業は営々と糸を吐き、巣をつくるクモの営みに似ていなくもなかった。)

別の言葉でいえば、これは建築家自身による美術館に対する批評である。この場合、美術館とは建築のみならずその活動の総体を指している。竣工から5年経った現時点での設計者自身による自作の建築に対する注釈と吟味、そして展覧会における空間の使い方から管理運営に至るまでを検証し、吟味した結果がここには反映されている。建築家が夢見た空間のダイナミズムや可能性を思う存分引き出し、現前させることこそ、この展覧会が意図するところである。しかもそれは言葉によるのではなく、展覧会という形式を借りた美術館の批評である。

ところで、青木氏は杉戸氏を選んだが、その関係はキュレーターがある作家を評価し、個展を企画するというのとはまったく異なっている。もちろん、杉戸氏の絵画も出品されるのだが、キュレーター青木氏が特権的に作品を選定するというのではない。全体のプランニング、館内をめぐる導線の設定、インスタレーション作品の構想など、すべての場面において両者は完全に対等である。杉戸氏は青森県立美術館に対する批評的営為の共同の実践者であり、のみならず青木氏の空間についての思考に対し一種のメタ批評としての役割を果たしている。杉戸氏は青木氏の提案に賛意を示し、ときには異議を唱え、修正を試みる。杉戸氏が体現するのは敢えて導き入れられた他者のまなざしなのである。

もとより、杉戸氏の絵画はごく初期の作品を見ても、画面一杯に描かれたステージ様の色面に小さな飛行機と思しき物体が描き込まれ、否応なく空間を意識させるものだった。しかもそれは、二次元平面内で充足し息づく絵画空間というよりは、奥行きのある遠近法的空間であると同時にフラットな平面でもあるという、一種の両義的な空間装置として画面に組み込まれている。事実、杉戸氏は画面を構成するユニットとして、木製の玩具のようなテストピースを作成し、その形態が折に触れて画面に現れたりする。彼はまたキャンバスに下塗りを施した後で、グリッドやストライプを描き込み、さらにその上にペイントしていく。グリッドやストライプは秘められた構造として静かに画面を支配している。ポップな外観の背後で実は強固な幾何学の世界を有する、きわめて鋭敏な空間感覚を備えたアーティストなのだ。

このふたりによって、展覧会の構成案が練られていったわけだが、その試みは新たな導線の設定、ハードに手を加える、たとえば展示室の壁に穴を開けるといったドラスティックな提案、さらには周辺の環境も含めた風景への注釈といったさまざまなレベルに及んでい

る。作品はあらかじめ決められた展示室のみに展示されるわけでない。いつもはガラスケースや梱包資材が散乱しているバックヤードに青木氏の建築模型が展示されたり、こどものためのスペースがカフェに変更されたりもする。いわば、空間に付与された機能を一時的に剥ぎ取り、シャッフルし、別の機能を付与するということでもある。それはまさしく小学校のものはや教室として使われなくなった空間に作品を展示することに似ている。

ここまで主として美術館の導線や空間について語ってきたが、展示作品についても触れておくべきだろう。青木氏についていえば、青森県立美術館の当初のプラン、その後変更を余儀なくされ、実現されなかったプランまでも含め、建築模型、図面、写真などが紹介される。そして、青森以降の最新の仕事の建築模型、素材のサンプルなども展示され、青森県立美術館が青木氏の仕事のなかでどのような意味を持ち得たかが示されるだろう。

一方、杉戸氏の絵画についてはごく一部の作品を除いて大半が新作となる予定だが、詳細は明らかになっていない。断片的に私たちが知り得た範囲では、野外に設置される建築的インスタレーション「ぼよよんな小屋」に関係すると思われる家や小屋の形象がときおり現れる。それはこれまでの彼の作品にしばしば登場してきたステージや山や塔のような形と同じく、画面の基本的な構造体として機能しているように見える。

ここで特筆すべきは杉戸氏の風景への関心だ。彼は美術館の中だけでなく、建物を巡る環境、広大な敷地に広がる草原や斜面、小道や木立までも含めて、青木氏とともに歩き回っていた。屋外でのインスタレーションは青木氏と杉戸氏、どちらの作品とも言えないのだが、もともとは杉戸氏の発想に基づくものと思われる。彼は風景のなかで何か足りないと感じられる場所に何かを付加していく。それは形であり、色彩である。赤い屋根の「ぼよよんな小屋」はそうした足し算の結果であり、八角堂の上のレモン色の巨大な風船もそうだ。キャンバスに絵具を置いていくように、風景に物体＝構造物を挿入していくのだ。

そして風景に設置された物体＝構造物には、青木氏が実現し得なかった設計案の残影が見出される。青森県立美術館は当初は現在よりはずっと壮大な規模で構想されており、美術館の周囲にはアーティスト・イン・レジデンスのための施設が点在することになっていた。「ぼよよんな小屋」は過去の記憶をなぞりつつ、蜃気楼のようにつかのま春の「はらっぱ」に現れるのである。

つまるところ、青木氏の建築と杉戸氏の絵画のいずれもが空間と風景についての思考であり、試行錯誤の過程にはほかならない。青木氏の言葉を借りれば、それらは「完結することなく、常に少しずつ生まれ変わっていくもの」であり、「いろいろな可能性に向かって広がっている『テストピース』」である。<sup>2</sup> 創造活動において共通する姿勢を持つふたりが、青森県立美術館を対象に批判的スタディを行った。この展覧会の目的はその過程を包み隠さずそのまま見せることでもある。

青森県立美術館は遠大な理想を掲げつつも、開館 5 年目にして必ずしもそれを十全に実現できているわけではない。この展覧会もあるべき美術館に到るひとつのステップ、テストピースと位置づけられるべきだろう。建築家と画家のふたりによる美術館批評に対し、今後青森県立美術館はどのように応答していくのか。そのことが求められている。

(しおだ・じゅんいち / 美術評論家、前青森県立美術館美術統括監)